

博物館だより

No.179



令和3年10月1日

みやこ町歴史民俗博物館発行
福岡県京都郡みやこ町豊津1122-13
TEL 0930-33-4666
FAX 0930-33-4667

博物館休館日カレンダー						
2021年10月						
日	月	火	水	木	金	土
26	27	28	29	30	1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31	1	2	3	4	5	6

休館日 ※情報はR3.9.16現在

◆博物館NEWS

博物館秋季企画展

「みやこの猫ものがたり展」

当館では、令和3年11月9日（火）から博物館秋季企画展を開催します。

みやこ町は「日本最古の猫の記録」の舞台になった町で、関連する史跡が所在しています。また博物館には、夏目漱石の代表作「吾輩は猫である」に関連する資料が収蔵されています。これらの資料は、いずれも「猫の日本史」に欠かせないものであり、他ではみられない希少な事例として注目されます。歴史民俗博物館では、これらの貴重な「猫遺産」を町内外の人々に広く知ってもらうことを目的として秋季企画展を実施します。開催期間中は、みやこ観光まちづくり協会の協力により「わたしのねこじまんフォトコンテスト」応募作品の写真を博物館ロビーで展示いたします。子どもから大人まで楽しく見学できる内容ですので、是非ご来館ください。※新型コロナウイルス蔓延防止に伴う制限等により、企画展の実施を含め開催内容に変更が生じる場合があります。

■開催予定期間

令和3年11月9日（火）～
12月19日（日）
9時30分～17時まで
（入館は16時30分まで）

■場所

歴史民俗博物館企画展示室兼
研修室及びロビー

■観覧料

関連事業とも常設展の観覧料
でご覧いただけます
大人（200円） 高校生以下（100円）

企画展関連事業（予定）

- （1）ギャラリートーク
先着40名まで参加可（定員になり次第締め切らせていただきます）
- ① 講師 井上信隆（当館学芸員）
水上斗夢（みやこ観光まちづくり協会事務局長）
- ※展示資料及び応募写真について説明（1時間程度）
- ② 実施日時
令和3年11月23日（祝・火）
午前の部 10時～（20名）
午後の部 13時～（20名）
- ③ 場所 歴史民俗博物館
- ④ 申し込み方法
電話による事前申し込みの先着順となります（申込受付は11月9日10時から）。お申込・お問い合わせは博物館（上記連絡先）へお問合せ下さい！



▲「猫の歴史はみやこ町から？」ご来館お待ちしております。

- （2）「わたしのねこじまんフォトコンテスト」応募写真の全作品を展示
- ① 実施日時及び場所
開催期間中博物館ロビーに展示。
- ② 内容
みやこ観光まちづくり協会が実施したフォトコンテストの応募写真（約380点）の展示。

◆講座・教室・催し物ガイド

10月の歴史講座

- 【漢詩紀行講座】
10月2日（土） 9時30分～
- 【古文書講座】
10月9日（土） 10時～
- 【古典かな講座】
10月16日（土） 9時30分～
- 【みやこ学講座】
10月23日（土） 10時～
- ※日程等変更となる場合があります。
- ※見学会等は別途通知します。

博物館で「楽習」始めませんか？

博物館は郷土資料と学芸員らのサポートによる知と学びの拠点です。以下の会や講座を利用して楽しく学びませんか？詳しくは博物館へお問合せ下さい！

- ① 歴史講座（4教室開設）
館や町内外の文化遺産を題材に町の歴史と文化を学びます。
- ② 博物館友の会
バスハイク・歴史たんけんウォーク等の学びの旅やイベントに参加できます。
- ③ 文化遺産ボランティア養成講座
町の宝をガイド＆ガードするスタッフを募集・養成する講座です。今からでも大丈夫！



▲歴史講座（みやこ学）での現地見学の様子 最近は近場のウォークが主となっています

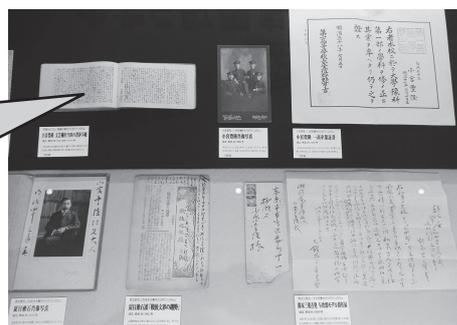
8月の業務日誌から

7月13日（火）から始まった「いろいろミニ展示」。このうち「いっぴんミュージアム」は「リアル三四郎の世界を観る」と題した初公開資料展で、ミニ展示ながら興味深く熱心にごぞき込む方もおられました。

8月8日（日）に行われた体験教室「土器をつくろう！」で焼き上げた土器の引渡しが、28日（土）～31日（火）にかけて行われました。期待と不安の入り混じった顔が、帰りは笑顔となっていたのが印象的でした。



▲焼きあがった土器とご対面！軟らかだった素地がしっかりと世界に一つの「MYうつわ」となってお機嫌の皆さん



▲小宮豊隆（三四郎モデル）の一高卒業証書や鈴木三重吉（与次郎モデル）のモデル辞任届など10点を初公開

みやこの歴史発見伝 142
令和とその時代 20

―豊前国分寺三重塔を科学する⑤―

首里城火災と「赤」の復元

沖縄県を象徴する文化的建造物「首里城」の火災から今年31日で2年を迎えます。同年に起こったフランスの「ノートルダム大聖堂」の火災と併せ、その後の文化財防火対策を見直すきっかけとなり、現在もその復元が望まれています。平成に復元された首里城は、外壁や瓦の鮮やかな赤のイメージが印象的ですが、激しい戦禍で焼失を免れた当時の絵図や文献資料など僅かに残された資料を手掛かりに当時の「赤」を再現する作業は困難を極め、様々な人々の技術を集結した結果、「鮮やかな赤」の復元に成功しました。

私たちは、日常生活の中で様々な色に囲まれています。中でも「赤色」は交通信号の「止まれ」を意味し、消防車をはじめ、緊急車両の塗装に用いられているように人命に関わる緊急性の高いメッセージが込められた色として認識されています。その理由として視覚的に強い刺激を与える特性が挙げられ、その名称も「明るい」や「朱・緋」がその

語源とされています。また赤色は「血」や「火」を連想することから「まじない」や「魔除け」の思想が込められていることも世界的に共通しています。

町内でも約2000年前の壺をはじめ、京築地域で唯一の装飾壁画古墳である皆見大塚古墳（みやこ町皆見）の石室には、赤色の顔料で「×」などが描かれています。これも死者の魂に対する「魔除け」などの願いを込めて、約1450年前の人の手によって描かれたものと推察されています。

クリーニングされた三重塔

一昨年、豊前国分寺三重塔は、改修工事以来、約30年ぶりに塔全体を対象にしたクリーニング作業が行われました。壁や柱に塗られた朱色がより鮮明になり、SNSの投稿を目的とした人々の来訪も増加しています。奈良時代の寺院建築は柱や壁が赤く塗られているイメージが強く、当時の豊前国分



雪化粧に赤が「映える」豊前国分寺三重塔



豊前国分寺三重塔の瓦と赤く塗装された屋根の部材

寺境内に建てられていた「七重塔」も赤色であった可能性が高いものと推察されますが、これを実証する資料は確認できず、色の復元は不可能なものでした。

国分寺の塔は本当に赤色だった？

塔など古代の瓦葺の建物では、建築時、屋根の部材を塗装した直後に瓦を葺くと稀にその塗料が瓦に付着し、1300年の月日が経過しても瓦にその痕跡を留めた状態で出土することがあります。近年、豊前国分寺跡から出土した瓦を詳しく再調査したところ、一枚の平瓦の端に当時の国分寺の建材に塗られたものとみられる赤い顔料が直径3mmほど確認することができました。この僅かな付着痕を

東京文化財研究所の協力のもと分析調査した結果、「ベンガラ」という古代の赤色顔料であることが分かりました。近年の理化学的な調査技術の発展により、この小さな痕跡から塔をはじめとする建築物が赤く塗られていた可能性が高いことが実証されました。

「朱」と「ベンガラ」

豊前国分寺が造営された約1300年前には、「朱」と「ベンガラ」の2種類の赤色顔料が使用されたことが確認されています。「朱」は主に「辰砂」とよばれ硫化水銀で構成される鉱物です。奈良時代には「丹」とよばれ、「丹生」という地名はこれを産出する鉱山に由来するともいわれます。「ベンガラ」は、「酸化鉄」を主要成分とするもので、主に鉄鉱石や焼いた土から鉄分を抽出して製造されます。また約17000年前のフランスの洞窟壁画をはじめ、日本でも約9000年前からその使用が確認されるなど「最古の顔料」

のひとつに位置付けられています。色調が鮮やかな反面、高価な水銀で構成される朱に比べ、天然素材を原料としたベンガラは非常に安価で人体にも無害であり、また防虫・防腐効果が優れていることから、外壁をはじめ様々な塗料として多用されました。

大分県別府市にある「血の池地獄」は1300年以上の歴史を誇る日本最古の天然地獄のひとつで奈良時代に編纂された『万葉集』



豊前国分寺跡出土平瓦に確認された赤色顔料痕(矢印箇所)

には「赤池」、豊後国の『風土記』（地方の歴史や文物等をまとめた奈良時代の書物）には「赤湯泉」としてその名が記載されています。この地獄の鉱泥は、その名のおおりに赤く防腐作用が優れていたことから、古代の建築物の塗料にも用いられたことが文献に記録されています。地獄の鉱泥がベンガラの役割を担って古代の建物の塗料に用いられたことは国内でも非常に珍しい事例として注目されています。

小さな痕跡から大きな発見！

豊前国分寺跡から出土した瓦に付着していたベンガラをもとに当時の塔の色調復元を試みたところ、現在の塔の色に比べて、若干、落ちていた色調の赤色であった可能性が高いことが判明しました。また、これまで高価な朱が塗られていたイメージが強かった奈良の代表的な寺院でも、その多くが「ベンガラ」を塗布していたことが調査で確認されています。現在とは異なり「モノクロ」の世界の中で生活していた当時の人々にとって、鮮やかな赤色で彩られた高層建築物の塔の出現は、かなり衝撃的なものであったことが想像され、「ベンガラの赤」は単なる建築塗料だけではなく、心理的・呪術的にも重要な役割を果たしたことが窺えます。

（井上信隆）